



『トクシマ・アンツアイガー』

第9号

徳島 1915年5月30日

われわれの敵イタリア

イギリスの電報が何度も伝えていたことは、間違いではなかった。イタリアは、5月23日にオーストリア・ハンガリーに宣戦を布告したのだ。

こうした事実を通して世界史は、ごくわずかな歴史家しか書きとめることがなかった条約違反・背信をひとつ増やすことになった。イタリアはここ数世紀の間に衰えていこうと、「イタリア」の名が消えることはなく、地球があるかぎり「裏切り」と同じ意味を持ち続けるだろう。

オーストリアとイタリアの間の仲たがいの進展を逐一跡付けることはできなかったので、イタリアがすぐにもわれわれを攻撃してくるとは信じにくかった。われわれは何十年も三国同盟¹に属していたイタリアを、仲間と見なすことに慣れきっていたからだ。

1 1882 - 1915年

今日イタリアが世界の列強の位置にあるのは何よりも三国同盟に属していたからなのに、今やひどい裏切り方でそれを破ったのだ。

われわれもオーストリアも、イタリアのこうした歩みを止めようと力を尽くしてきたのではなかろうか。ここにある報告が正しければ、オーストリアは決定的な決裂以前に、すでに南チロルとイストリアの一部の譲渡とその他の譲歩を表明していた。にもかかわらず分別を失ったイタリアは、オーストリアが飲み込めるわけもない恥知らずな要求にこだわった。いうまでもなくドイツは、イタリアとオーストリア関係が決裂するとすぐにイタリアに宣戦を布告した。

イタリアの介入が、戦争の進展にどう影響するのはもちろん予告できない。イタリアに関しては準備不足である。手元にある情報によると、緊急事態に備えてオーストリア・イタリア国境に70万のドイツ・オーストリア軍が待機している。常勝の軍隊と優れた指揮官を信じているので、彼らがこの新たな戦場でも勝利をえ、この地域でイタリアは部分的にでもあの許しがたい裏切りへの正当な罰を受けることになるだろう。

もちろん、これ以上イタリアとの戦いがどのようになるかを探ってみても退屈するだけだろう。なぜならイタリアが戦争に介入する場所はいくらでもあるからである。

イタリアの最初の攻撃は、イタリアの国境からほぼ40kmしか離れていないオーストリアの軍港トリエステに向けられるらしい。すでにチロルとイタリアの国境で数々の国境紛争が起きており、ロイター電によると5月25日にイタリア軍がクラインのオーストリア領に侵入し、セロイグアノ、ゲルツ、コルモンズというオーストリアの地域を占領したらしい。

オーストリアの飛行機はすでにローマを爆撃したという。ヴェニスとは空と海から攻撃を受け、さらにオーストリアの艦隊がイタリアの海の砦「アンコナ」を砲撃した。

われわれは大きな関心を持ってこの戦場の事態についてのさらなる情報を待っているが、イタリアがみずからの仕打ちへの正しい報いを受けると

確信し望んでいる。

.....

日本の歴史（8）

後冷泉天皇（1045 - 68 年）の代の豪族（大地主）安部頼時の蜂起は、藤原氏の古くからの権力が失われていることを示した。藤原氏は反乱を抑えることができず、天皇は源氏²に命じて平定させなければならなかった。

長くかかったが、後三条天皇（1068 - 72 年）からまたエネルギーな天皇が現れた。天皇は努力のすべてを、藤原氏の後見とずさんな管理を排除することに振り向けた。統治の仕事はできるだけ天皇自身が行い、藤原氏は他の貴族と同じく自分の家財を管理することで満足せざるをえなかった。官職の授与はふたたび天皇だけがするようになり、それとともにひどい売官はなくなった。後三条天皇は息子の後見として統治を続け、そうすることで藤原氏がふたたび後見人になることを阻止するため早くに退位した。後見の時期はそう長くなかったが、この天皇はこうしたことをもきちんと行った。後三条天皇は息子の白河天皇（1072 - 86 年）の後見をしたが、同様に白河天皇は息子の後見をし、その死後は孫の後見もした。こうして藤原氏は完全に主導権を失った。もっともまもなくまた別の氏族がその地位に着くことになるが、藤原氏の崩壊は力による変革を経ずに行われたが、それは彼らがみずからの影響を武力によって維持することができなかったからである。

白河天皇は熱心な仏教徒だった。天皇は立派な寺を建てさせ、3,000 以上の仏像を作らせ、とても華やかな金のかかる霊場巡りを行った。このような出費に行き詰った天皇は、必要な金を手に入れようと官職や特権を売りさばいた。天皇が仏教に肩入れしたため僧は思うままにふるまった。僧

2 源頼義・義家：前九年の役

たちはすでに奈良時代から世俗の権力を握っていた。それにつれて彼らはたがいに争いあい、朝廷をも脅かすようなさまざまな略奪行為を行った。

天皇は必要ときに武力で命令を果たすような軍隊を持たなかったため、それに対抗する力がなかった。

前に陸奥地方の乱を源氏に鎮めてもらったこともあって、結局天皇は僧兵への警護を平家と源氏に依頼せざるをえなかった。したがって少し前に藤原氏の専横を取除いたばかりなのに、朝廷は新たに他に依存することになった。

白河天皇の後を継いだのは孫の鳥羽天皇だが、この天皇は初めは息子の崇徳天皇の摂政を務めた。しかしこの天皇はまもなく崇徳天皇を廃嫡し、一番下の息子を天皇³にし、その死後はもうひとりの息子の後白河天皇を立てた。鳥羽天皇の死後、退位させられていた崇徳上皇は強力な軍隊を集め御所を包囲した⁴。困った後白河天皇はまた源氏と平氏に助けを求め、血なまぐさい戦闘の後に崇徳上皇軍は敗れ崇徳上皇は捕らわれた。上皇は四国の讃岐地方に流された。こうして源氏と平家が天皇にとって欠くことができなくなると、それぞれが権力を独占しようとした。こうして両者は対立することになり、誰が優位に立つかを最後に決めるのは武力となった。

源氏は藤原氏と手を結び、1159年に平家に対する戦いを開始した⁵。彼らはすばやく御所を占拠しようとしたが、まもなく平家の軍勢によって決定的に打ち破られた。平家は、源氏一族を永久に無害なものにしようとした。一族に連なるものはすべて捕らわれ散り散りにされ、同調者は流されたり寺に押し込められたりした。平家は実質上の国の支配者となり、宮廷と血縁を結びほとんどすべての官職を手に入れた。そのうえ平清盛は高倉天皇を退位させ、自分の孫である生まれたばかりの息子を安徳天皇として皇位に着け、幼い天皇の後見人となった（1180年）。したがって平家の支

3 近衛天皇

4 保元の乱

5 平治の乱

配は安泰のように見えた。けれどもそうこうするうちに源氏は密かに彼らに忠実な支持者と結びつき、平家を倒す好機をうかがっていた。源氏は、十分な軍勢を集めるとすぐに信濃地方で兵を挙げた。彼らに対抗しようとした平家軍は打破られ、幼い安徳天皇を連れて京都から逃れなければならなかった。源氏の中での反目が平家に京へ軍を進めようという勇気を与えたが、まったく成功しなかった。平家は勝者に追われてさらに西に逃れた。下関に近い壇ノ浦での大きな海戦で平家の一族はすべて敗れ去り、一部は陸地にたどり着こうとして倒れその他は海中に身を投じた。その中には、平清盛の妻である祖母に抱かれて入水した安徳天皇も含まれていた。

われわれの聖霊降臨祭コンサート

聖霊降臨祭の初めの日に、われわれのオーケストラはまたしても本当に楽しい夕べを用意してくれた。プログラムはとても多様で巧みにまとめられていたので、おそらくそれぞれにかなり費用がかかったことだろう。非常に勤勉なオーケストラはまたたくさんの新しい試みを提供してくれた。彼らはきわめて冷静な指揮者の下で、モーツァルトのオペラ「ドン・ジョヴァンニ」序曲をとてとても上手に演奏することで見事に大きな課題を解決してくれた。事情をよくわきまえている人なら、大まかにでもこうした成果にどれだけの努力と労苦が込められているかを評価することができよう。それに対してわれわれがくり返すことができるのは、楽団メンバーの多大な労苦と献身に最大級の感謝を捧げることだけである。

チャイコフスキーの二長調協奏曲からの「カンツォネッタ」は前にイースター・コンサートで聞いていたが、いつも大喝采を博しているのだからもっとくり返し聞いてみたい。

ことに讃えたいのは、コンサートの最後に何人かの若い楽団メンバーに

も独奏の機会が与えられたことである。例えばラングハイム二等砲兵(ヴァイオリン)・シュミート一等砲兵(チェロ)・ドーベール一等砲兵(ビオラ)によるハイドンの「シチリアーノ」はとてもよかったし、ギンシュマン二等砲兵によるクラジンスキーの歌曲「あなたの胸で夢を見させて」のトランペット・ソロも大喝采だった。残念だがこのコンサートでは、アイヒホルンの「パストラル」は合奏では演奏されなかった。けれどもこの曲は、以前のコンサートですーっと完全な形で聞いている。クローゼの「結婚セレナーデ」は本当に好ましく、できればもっと何度でも聞きたいくらいだ。

演奏の第2部では、グノーのオペラ『ファウスト』からの抜粋である大幻想曲を例外として、ほとんどが軽い曲だった。ことにトランスラトゥールの自動車行進曲を強調したい。この曲はまさに大喝采を博しすぐに人気が出た。

聖霊降臨祭の2日目に小さなプロムナード・コンサートを開くというのは、きっとたくさんの人に喜ばれる本当に良い思い出だった。できれば暖かい季節の初めである今を、もっとたっぷりとこのような野外の音楽の花束で楽しみたいものだ。

チェス・コーナー

(駒の略語 K=キング、D=クイーン、L=ビショップ、
S=ナイト、T=ルーク、B=ポーン)

第11問の解答

1. De1+ e5+ f6 x e5
2. Ld4 x c5+ b6 x c5
3. Sd2 - e4+ d5 x e4
4. Kd3- c4 任意の手
5. Tc1 - d1 詰み

第12問の解答

1. c7 - c8(L!) Kd4 - c6
(または c4)
2. Lc8 - b7(または e6) で詰み

あるいは

3. $Sd2 \times c4 + d5 \times c4$

4. $Kd3 - e4$ など

第 13 問

白：Ke4, De2, Td2, Ld8, Ba3, f4.

黒：Kc5, a4, c6.

2 手詰め

第 14 問

白：Ke4, Db3, Lb4, Ba3.

黒：Kb5, Ba7, b7.

3 手詰め

チンタオのドイツ人と（3）

艦船のほかに飛行機が、チンタオの生活を興味深くかつ不安定にした。他方陸上の日本の陸軍はチリ湾⁶から迫ってきて、野戦鉄道を敷設して迫撃砲と榴弾砲を設置した。日本の艦隊は4機の水陸飛行機を持っていた。後にさらに4機の陸上飛行機が加わった。これらの飛行機はほぼ毎日遠くからもうぶんぶんという音を響かせて現われ、きらきらと日の光を浴びながら街と要塞の上を飛んで行った。初めのうちは駐屯部隊の兵は、それらに速射を浴びせた。機関銃は1分間に100発を見舞い、銃を持っている者は弾を放った。けれどもこれらの銃撃は街に弾丸の雨を降らせ、中国のクーリーが身を隠すきっかけとなる以上の成果はなく、まもなく銃と機関銃は効果がないことが明らかになった。したがって特別の砲が用意され、毎日やってきそうな飛行機の進路に榴弾砲を置いて撃つことになった。しかし大胆な操縦士のただの一人も打ち落とすことができなかった。ある日私は、

6 労山湾

すぐそばで砲弾が炸裂して複葉飛行機の一部が落ちるのを見た。墜落すればと思ったが、操縦士はほんの一瞬空気の渦で浮力を失っただけだった。砲撃を縫ってこの飛行機は猛禽類のように要塞の上を旋回した。飛行機は次々と爆弾を落とし、砲の補給所や信号所・オーストリアの巡洋艦「カイゼリン・エリーザベト」・電機施設・要塞に打撃を与えようとした。けれどもこれらの爆弾はヨーロッパの戦場と同様に十分効率よくは働かず、大きな損害を引き起こせるほど強力ではなかった。2, 3人の中国人が死に、一人のドイツ兵が怪我をし、屋根が打ち壊され道路に穴ができた。しかしそれがすべてだった。爆弾は蒸気が吹き出るようなシュウという気味の悪い音を立てて落ちてくるので、日本の飛行機が上空に浮かんでいるときに戸外にいるのはまったく不愉快だった。われわれは多かれ少なかれ、砂に頭を突っ込んで安心しているダチョウみたいものだった。チンタオの街で、敵の飛行機が近づいてくると人力車の幌を跳ね上げている男をひとり見かけたし、中国人たちが木陰に安全を求めるのを眺めた。

チンタオではドイツ人は繫留気球を持っていた。一つは毎日大きな黄色の泡のように空中を飛んでいて、日本人は小さな大砲を持ってくれば榴弾砲の弾で穴を開けることができた。もう一つは古いもので、後には日本の砲兵隊に砲火を打たせてその砲兵隊の配置状況を知るために揚げられていた。この気球には、ボール紙でできた望遠鏡を通して下の地域を観察する藁人形が入っていた。けれども残念なことに気球をひっくり返すような強風が吹き、とうとうケーブルが切れて黄海の上に渦を巻いて落ちてしまった。後から耳にしたことだが、全体がイギリスや日本の見物人にとっては大きな謎だった。彼らの最終意見ではドイツ人が、自分の保塁と向き合っている低い一連の丘にいる日本人や大砲の設置の動きを確かめるのに役立つのは、一機の「タウベ」だけだった。向こう見ずな操縦士であるプリューショウ中尉は、わずか3ヶ月の訓練しか受けていないのにすばらしい成果を挙げた。彼は毎日毎日日本軍の陣地の上空を、絶え間ない榴弾砲と時には敵の飛行機に追われながら、足で飛行機を操作して飛び回り略図

を書いた。彼にとって一番難しかったのは着陸だった。彼に用意されていたのはたった一ヶ所だけだったからである。日本軍はまもなくそのことを知り、操縦士が着陸しようとするとその場所に激しい砲火を浴びせた。チンタオ陥落前日の11月6日の朝、プリューショウ中尉は総督の特別の命令を受けて飛行機に乗り、包囲軍の上を通過してチンタオの南180マイルにある町海州まで飛んだ。彼は愛機を中国人の下に残し、12月にアメリカ合衆国に旅立った。

封鎖宣告の1ヵ月後の9月26日、日本軍は膠州の保護領の境に沿って十分な兵力を配置し、前進行動ができるまでになっていた。9月2日に竜口から中国上陸を開始した。そこは黄海沿いにある山東半島の反対側で、チンタオから150マイル離れていた。水かさの増した流れ、氾濫している土地、ぬかるんだ道路が大きな苦労を強いた。9月14日に騎兵隊は境界から10マイル離れた即墨に達した。9月18日には最初の歩兵隊がそこに着いた。陸軍の主力は即墨近くに集結し、9月の最後の週には境界をパトロールしていたドイツの小部隊と最初の激突を起こした。チンタオへの平坦でない地域の道は、1,000名足らずのドイツ兵と6機の機関銃と2基の大砲で守られていた。(9月29日までの)3日の間にこれらの小部隊は、半島を横切って延びている街のすぐ前の主力防衛ラインの後ろに後退した。それから10月31日まで日本軍は、ドイツ軍の前線の真向かいに大砲で取囲む陣形作りに従事した。彼らは時間を、橋の建設・野戦鉄道の敷設・砲床の延長に費やした。イギリスの小部隊である800人の「南ウエールズ辺境民」と400人の「シーク教徒」が、日本軍に合流し働いていた。彼らはドイツ側の歩兵保塁と鉄条網へと掘り進んでいるとき、並んで塹壕の中にいた。この間夜も昼も、ドイツ側の大砲は日本軍の陣地を見つけると街を震わせた。日本側の唯一の応答は、湾から彼らの飛行機を脅かしているオーストリアの巡洋艦「カイゼリン・エリーザベト」とドイツの砲艦「ヤーグアル」を追い払い払うことだった。

われわれがようやく、日本側は何らかの秘密の理由で意図的に準備を遅

らせているという見方に達したとき、破壊活動が始まった。睦仁⁷の即位日である 10 月 31 日の丁度朝 6 時に、140 ミリ砲による陸上からの砲撃が始まった。そのうちの 80 門は、攻城砲、臼砲、榴弾砲であり、さらにそのうちのいくつかは、すでに旅順の戦いで名声を博していたものだった。大きな砲弾が、カイザー・ドックと及び「スタンダード石油」と「アジア石油」会社のタンクを炎上させた。朝日はまもなく、遺体に掛けられた白布のように街を覆った厚い煙のかたまりによって暗くなった。タンクの上を飛び越えていく砲弾はものすごい高さの炎の柱の渦を巻き上げた。近くの丘から見る事ができたのだが、中国人クーリーが流れ出した油を持ち出そうと駆け回っていた。

つづく

スポーツ

生徒の競漕

金曜日（5 月 28 日）に近くの学校で競漕が行われた。距離はほぼ 800m だった。スタートは収容所の下の脇運河の河口にあり、スタート地点はそれぞれ青・赤・白で印されていた。ゴールはわれわれの住まいのすぐ前にあり、それぞれ川の中の青・赤・白の旗で標示されていた。こちらの川岸にも、教師と校友のための小さな客用のテントが立てられていた。出場しない生徒は関心の強い観客として両岸に坐っていた。観客数がわずかなことからすると住民の参加はそう多くはなかった。天気は上々で、舟の右からの穏やかな風は入潮とあいまって航行をスムーズにした。ボートには 6 本のオールと固定した席があった。2, 3 艘がグループになってスタートした。区別の印は青・赤・白の帽子だった。全部で 16 レースが行われ、奇妙なことにそのうちの赤帽子組だけで 11 回勝利した。対岸の掲

7 明治天皇

示板が知らせているのは、いつも一つの色が出した時間だけだった。それによると一番早い赤のボートは2分3秒で、それに次ぐ3艘も同じく赤で2分5秒・2分5秒・2分8秒だった。もちろん赤帽子はいつも間違いなく有利な最良のスタート地点を手にしていたが、それに加えて一番のオール捌きも見せた。レースは何度もコースをよぎる帆掛け舟に妨げられた。コックスはあまりにも仲間を励ますことに熱心なために肝心の仕事、つまりボートの進路を保つことを忘れ、そのためにボートのオールが互いにぶつかりあい、何度もスタートのやり直しが必要になった。いくつかのレースは大接戦となり、最初のボートがゴールラインを通過するとたいていは他のボートは試合を諦めた。もちろん催し全体は、ドイツの学校レースに対して取るのと同じ水準を当てはめることはできなかった。そんな場合でもわれわれは、ドイツ人の優れた徹底性と組織能力を見失ったりしないものである。

献立表

聖霊降臨祭の日々ならびに「徳島の肉料理」への楽しい思い出として、
 今月23日から30日までの一週間の献立表を以下にあげる。

曜日	朝	昼	晩
日曜日	コーヒー・バター パン	グーラシュ	新鮮なソーセージ
月曜日	コーヒー・卵・パン	ベーコンエンドウ	臓物ハム
火曜日	ティー・パン	船員用シチュー	シロキャベツ（牛肉）
水曜日	ティー・パン	インゲンマメ／牛肉	ライスのブイオン煮
木曜日	ティー・パン	グリーンピース／豚肉	卵スープ
金曜日	ティー・パン	ケーニヒスベルク団子	ジャガイモスープ
土曜日	ティー・パン	ベーコンエンドウ	ミルクライス

このような一覧表を読むと、誰でもフンピッヒ一等兵曹と調理場係りのりっぱな仕事振りに感謝せざるをえまい。

この献立表には、ソーセージとハムを作るのに選ばれた豚を除けば、おそらく誰もがとても満足していたことだろう。

愛の贈り物

以前復活祭にすばらしい贈り物でわれわれを驚かせた神戸のドイツ人女性たちが、聖霊降臨祭に下着と靴下を一箱送ってくれた。それに対して、この場で贈り物を下さった親切なご婦人方に最大の感謝を述べたいと思う。

「ドイツ人であることを喜ぼう」

若者よ、みずからの内にあるものを蘇らせよう
ドイツ人であることを喜ぶという教えに
感受性と心を開こう
故国の栄誉の中へ育てゆけ！

どの国民もみずからの聖地を持っている
それぞれがみずからの隠れた^{きず}暇を持っている
常に故郷の栄誉のために生きよう
祖国の欠点を外国人たちの前でどのしるな

古い時代に事を始め支配した賢者が
残したものを心に刻め

けれども自覚した物分りのよさを持って
故国を知り尽くし愛せ

歴史が教えているものに気づこう
過去の警告がもたらしたものに
もしその純粹にドイツ的なものを守りたければ
永久にドイツの剣を無敵なままに止めよ！

外国語の知識は支えであり光である
君は外国を歩き回るがいい
けれどもどんなに唇が滑かになっても
思考と行動のうちにドイツ語をもち続けよ！

君の話は明確で賢い
外国語は思考の穴を埋めてくれる
われわれの言葉はまったく正しく
ドイツ人の感情をドイツ語で表現する

研究をするにせよ手仕事をするにせよ
筆やサーベルを使いこなすにせよ
いつもひたすら君自身に忠実であれば
君の仕事は故郷の勝利に役立つ

わが息子よ、忠実であれ
誠実は常にドイツ人の勝利への確信の武器である
ドイツ人であることを喜べ
故国の榮譽の中へ育ってゆけ！

トマス・フォン・ロンメル



シュピーゲル（鏡）

『トクシマ・アン
ツアイガー』第9号
ユーモア付録

フランスの義勇兵に対してバイエルン兵：

まぬけ、どっちが

いいんだ、撃ち殺され

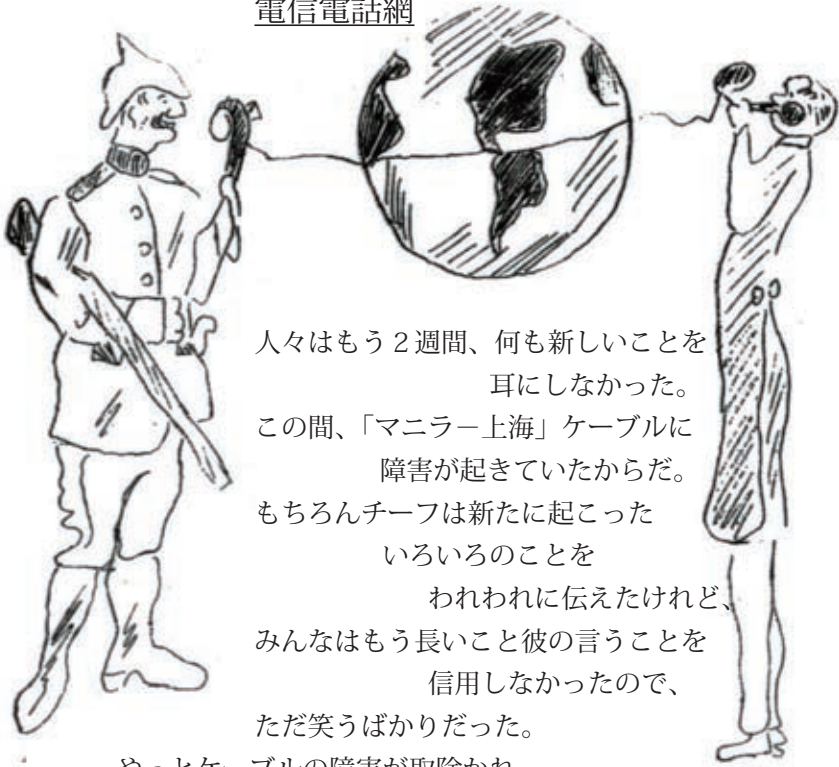
たいのか、びんたを

食らわせて

欲しいのか



電信電話網



人々はもう2週間、何も新しいことを
耳にしなかった。
この間、「マニラー上海」ケーブルに
障害が起きていたからだ。
もちろんチーフは新たに起こった
いろいろのことを
われわれに伝えたけれど、
みんなはもう長いこと彼の言うことを
信用しなかったので、
ただ笑うばかりだった。

やっとケーブルの障害が取除かれ、
われわれはふたたびドイツからいろいろのことを知った。
まず、再びランスを砲撃した。
そしてそこを奪取した。フランス人はこれは
スキャンダルだと叫んでいる。

どうしてこの美しい街を砲撃などできようか。
とりわけそこには大聖堂があるというのに。
ロシア軍はこっぴどい打撃を被った
彼らをカルパチア山脈からうまく追い出すことができた。
それで戦いで14万人が捕らえられ、
残りは倒れ、その他は逃げ去った。
リーバウとさらに遠い所でも事はうまくいった。
皇帝の父ちゃんは、もうすぐモスクワに

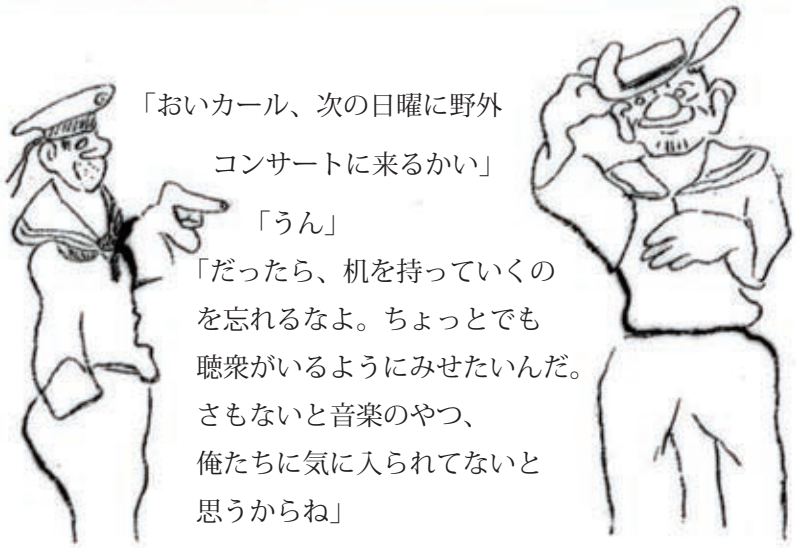
迫ってくるのではないかと考え、
びくびくしている。
イタリアは自分がとても強いと感じ、
さらに戦いを求めている。
だが待ってろよ、すぐ行くからな。
そしたらお前たちは逃げ出す
ことだろう
万歳の叫びで終わりというわけではない。
骨の髄までよく覚えておけ。
お前たちはまずドイツ人の
こぶしを感じる。
そしたら熱狂も終わりだ。
ジョン・ブルは予感に不安になりながら、
Uボート・ゲームを眺めている。
そして心の中で思っている、そんな
ことでは目標を達成できまい。
というのもあのルシタニア号事件は⁸
耳をつんざき、
かの勇敢なブリテン魂は不安の余り
すっかり縮みあがるからだ。
フィッシャー卿とチャーチルなどは退き、
国民はチャーチルを厳しく批判した。
なぜなら今やゆっくりとだが、イギリスという国が
駄目になっていることを知らされてきたからだ！
海戦においても示されている、ドイツの能力が敵の優位を
しのいでいること
敵の優位をものともせず、その傲慢の鼻っ柱をくじくのを。
しばらく前からジョン・ブルはひどい悪夢に悩まされている。



8 アメリカの参戦のきっかけとなった事件で、1915年5月7日にニューヨーク発のイギリス客船がUボートによって撃沈され、アメリカ人128人が死亡。



夢の中で、ドイツ軍が誇り高いアルビオンに迫ってくるのを見るのだ。
このようにわれわれは何ページにもわたって戦闘と勝利を
報告することができるが、
紙面が尽きたので今日のところはそれを諦めねばならない。
けれどもはっきりしていることだが確信は間違いない。
あちこちで戦いは勝利しており、われわれに何かが起こることは
ありえないのだ。



「おいカール、次の日曜に野外
コンサートに来るかい」

「うん」

「だったら、机を持っていくの
を忘れるなよ。ちょっとでも
聴衆がいるようにみせたいんだ。
さもないと音楽のやつ、
俺たちに気に入られてないと
思うからね」